引き裂かれた人生

山崎朋子

「死への準備」日記

千葉敦子

朝日新聞社

「死への準備」日記

発行　一九八七年八月一〇日　第一刷
　　一九八七年一二月　五日　第八刷

著　者　千葉敦子

発行者　八尋舜右

印刷所　大日本印刷株式会社

発行所　朝日新聞社

編集・図書編集室　販売・出版販売部
〒104-11　東京都中央区築地五―三―二
☎〇三―五四五―〇一三一（代表）
振替　東京〇―一七三〇

定　価　一〇〇〇円

Printed in Japan　ISBN4-02-255763-X

「死への準備」日記——目次

声の喪に服する——86・11・21 7
私ふうの母への愛——86・11・28 14
人生に求めたものはすべて得た——86・12・5 21
善意の洪水に辟易する——86・12・12 29
イラン-コントラ問題を取材する——86・12・19 36
よく遊び、よく働いたあの日々——86・12・26 43
感傷に浸っているひまはない——87・1・2-9 50
仕事も、闘病も、楽しみも——87・1・16 57
映画を見に行く——87・1・23 64
愛の中の死——87・1・30 70
おせちパーティーは楽しかった——87・2・6 78
遺言書に署名する——87・2・13 85
右胸のどの下にがんを見つける——87・2・20 92

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

パウル・クレー展での歓喜――87・2・27　98
爆発しそうな吐き気――87・3・6　106
日本のエイズ騒動はお笑いだ――87・3・13　113
タワー委員会報告をみて――87・3・20　119
幸福感は脳の働きに関連している――87・3・27　125
両親を強く誇りに思う――87・4・3　131
超伝導体とは？――87・4・10　137
私は典型的「移動型人間」――87・4・17　143
ソ連の開放政策とアメリカ人――87・4・24　150
円高の恩恵は還元されていない――87・5・1　157
引っ越し先を決めた――87・5・8　163
ともかく、六カ月生きた――87・5・15　170
休載――87・5・22

昔は気づかなかった差別——87・5・29 177
がんが小脳にあらわれた——87・6・5 184
休載——87・6・12
休載——87・6・19
新居に退院した——87・6・26 191
毎日をより充実させよう——87・7・3 198
バレエ「シンデレラ」を観る——87・7・10 205
休載——87・7・17
体調悪化し原稿書けなくなりました——87・7・24 212

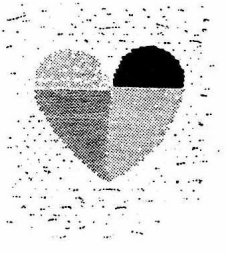
ブックデザイン——多田　進
装画・カット——三嶋典東

『死への準備』日記

本書は『朝日ジャーナル』一九八六年十一月二十一日号～一九八七年七月二十四日号に掲載された「『死への準備』日記」をまとめたものである。

声の喪に服する

86・11・21



○月×日

八一年の初めから病んでいた乳癌が、縦隔膜のリンパ節に転移し、その影響で声を失ってしまった。

左右の声帯のうち、右はまだ機能しているのだそうで、かすれ声は出る。だから、事情を知っている人となら電話で話ができないわけではないし、そばにきてくれれば、なんとか会話はできる。

しかし、無理して話をすると、ひどく体力を消耗するうえ、あとで激しく咳き込むことになるので、なるべく話をしないようにしている。

声を失うというのは、全く予期していなかった症状だ。乳癌の手術で片方の乳房を失

ったこともあるし、抗癌剤の副作用で頭髪を全部失ったこともあるけれど、声の喪失に比べれば、その痛手はとうてい比較にならない。

声の喪失は、ただ単に日常生活に不便を来すだけではない。私の声、私の話し方、私の語彙、私のことば遣いは、私がだれであるかを表現する重要な手段だったのだ。私の性格、私の受けた教育、私の成長度、私の知性、私の創造力、私の意志、私の機知を表す手段だったのだ。

とくにニューヨークという、最も話しことばが幅をきかせる社会で声が出ないのは、絶大なハンディキャップだ。ニューヨークが住みやすい、と感じてきた理由の最大のものは、私が英語でも日本語でも自分を自由に表現できる、という事実に基づいている。

たとえば、カクテルパーティー。身長一五四センチの私が部屋にはいって行っても、だれの注目も引かないが、いったん話を始めれば「よく通る」といわれた私の声に振り向いて、私の周りの輪に参加してくれる人が必ずいたものだ。

どんな集まりでも、最もよくしゃべる人のうちに、私は含まれていたはずだ。どんな問題にも興味を持っているので、必ず発言をしてきたし、数え切れない人々と大議論を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

展開してきた。

私の声については、作家の籔田鶴子さんが、こう書いて下さっている。

五月七日にはお電話を頂いて有難うございました。思いがけなかったのと、非常に元気な晴れやかなお声に途惑って、瞬間はどなたか、お名前をおっしゃっても面喰らいました。（中略）澄んだ、どちらかといえば美しいというとりすました感じより、人なつっこく愛らしい、温かさを感じさせる声質でした。

（籔田鶴子・千葉敦子共著『いのちの手紙』筑摩書房刊）

また、私の話し方については、『ニューヨーク・タイムズ』の東京特派員スーザン・チラがこう書いている。

ミス・チバは、早口ではきはきと話す。日本で女性の話し方にふさわしいとされている、はにかみや躊躇など一切なしに。

（『ニューヨーク・タイムズ』八一年八月八日付）

声と会話は私の武器だった。ニューヨークに引っ越してから、いくつも直面したこじれた問題を、電話で相手と話すことによって大方解決してきた。インタビューを拒否する人を、執拗に電話でかき口説いて承諾させたことも何度もある。

友人のシャーリーはこういった。

「あなたみたいに、いうべきものを持っている人が声を失うなんてね。何もいうべきものを持たない人たちが、いくらでも声が出るというのに」

こういう励まし方もあるのだ、と私は感心した。

声を出すのが苦しいので、必要最小限の会話しかしないようになると、頭が悪くなっていくのが分かる。会話というのは、最も知的刺激の強い日常活動なのだ。ものを書いたり読んだりするだけでは、十分な頭脳活動にならない。

話し方のスピードが落ち、単純な表現しか使わないようになって、ほとんど実質的に沈黙したまま一日を過ごすと、夕方になって、何かで表現したいという爆発しそうな表

現欲に襲われる。
私が放送ジャーナリストではないことに、感謝しなければならないのだろう。教師でも歌手でも舞台俳優でもないことを、ラッキーだと考えるべきなのだろう。カラオケファンでもないのだから、そう嘆き悲しむべきではないのかもしれない。
しかし、声を失うことは、一つの死を死ぬことなのだと思う。自分自身の重要な一部を失うこと……。
だから、私はいま自分の弔いをしているような気分だ。失ったものを、直ちに諦めることはできない。なぜなら、それは私が大切に思っていたものなのだから。私という人間の重要な一部を失ったのだから。
服喪の期間が明けたら、スピーチ・セラピストについて練習をし、「音」は出せるようになるつもりだ。だが、私の声はもう戻らない、と医師にいわれている。
こうして、一つずつ死を死んで、死の積み重ねが、最後の死へ私たちを導いていくのだと思う。一つ一つの死は、十分に悼んでやらなければならない。一つ一つの死には、それに先行する、一つ一つの輝かしい生が存在したのだから。

私たちは、喪失体験を通じて大きく成長する。だから、私もこの喪失体験を通じて成長したいと願う。

○月×日

FM東京の小島アナウンサーから国際電話がはいって、アメリカの中間選挙の見どころについてリポートしてほしいといわれる。小島さんの声は美しい。

「でもこんな声で……」

「お風邪ですか」

「いえ、別の病気です。声がよく出なくて、お聞き取りにくいでしょ」

「そうでもありませんよ」

途端に、飛び上がりたいほど嬉しくなった。こんなかすれ声でも、小島さんは私のリポートを求めておられるのだ。

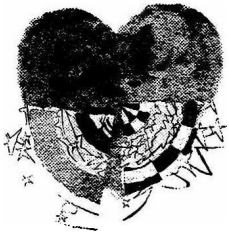
「声を我慢していただけるなら、ぜひやらせて下さい」

収録当日は、一日中留守番電話をかけっぱなしにして、一切電話に出ず、声を保護し

た。それでも、なんともひどい声だったが、とにかく無事録音はすませた。
声を失ったからといって、世界が崩壊したわけではないのだ。

私ふうの母への愛

86・11・28



○月×日

会計士のシャーリーは、子宮筋腫の手術を来週受けるので、落ち着かない。一〇年近く前に筋腫を取る手術を受けているのだが、また再発したので、今度は子宮ごと取ってしまうことに決めた、という。レズビアンの彼女は、医師のジョーンと一〇年以上もカップルとして同棲していて、自分の子どもを生みたいという願望はない。子宮を失うことには未練がないのだが、入院して手術を受ける、ということを考えただけで気が滅入ってしまうらしい。

「敦子のことを考えれば、私の手術なんて、なんでもないのにね」

という。無口なジョーンは、黙ってシャーリーの髪を撫でている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com